
絵俳書『両兎林』を読む

宝暦9年（1759）に刊行された絵俳書『両兎林』（以下「本書」）全三冊は、江戸座の俳人・巢居栖鶴が編集し、初代英一蜂（?～1760）が挿絵を添えている。出句者には大村蘭台（1670～1738）をはじめとする大名も名を連ね、往時の江戸座の華やきを伝えている。

本書についての先行研究としては、雲英末雄氏・伊藤善隆氏・二又淳氏による解題があるほか、収録される挿絵の源泉について考察した佐々木英理子氏の論考がある。一方、本書の内容―挿絵と発句の関係性―に焦点をあてた研究は未だ存在しない。本発表では、本書の発句と挿絵が織りなす相関関係に焦点を当て、蕉風連句との影響関係について試論を提示するものである。

本書には130図あまりが収録され、江戸座の諸家の発句各々につき、挿絵一図を見開き一丁に配している。奴や野郎、遊女、耕作図に登場する農夫など、英一蝶の風俗図を彷彿とさせるものが散見される。

本書の発句と挿絵の関係において特に注目されるのは、両者の内容に一見共通点の無いものが見られる点である。上巻21丁目、中巻31丁目の発句と挿絵など、数例が該当する。発表者は、これらは蕉門俳諧の連句の方法論である「七名八体」から派生した考えに基づいて行われたものと推察する。

例えば前述の例のうち、中巻31丁目の発句「年忘れ引出されてや順の舞」は、忘年会の騒ぎの中、酔った客たちが余興の舞を押し付け合っているという、よくある宴の情景を詠んだ句である。一方、この句に添えられた挿絵は「草摺引図」という、中世の軍記物語『曾我物語』の一場面取材のものである。発句に見られる卑近な宴会の情景と、草摺引図に描かれる中世武士の登場する情景とは、一見共通するところは無いように思われる。そこで、蕉風俳諧の連句論に目を向けてみれば、このようなありふれた現実を叙述する句に詠まれた情景や言葉から古典的な題材や事物を連想して結びつける方法として「面影付」があることがわかる。これは、日常的な情景を詠んだ前句に、あえて古典的な場面設定や事物を連想させる句を取り合わせることによって生み出される、雅な古典世界と卑近な日常世界の落差に俳諧的な滑稽味を感じさせる狙いを持った技法である。「年忘れ」句の挿絵と発句が取り合わされた背景には、この「面影付」に近い発想方法が見られるのではないだろうか。

本書の編集者・栖鶴が属する江戸座は、宝井其角（1661～1707）を祖とした俳諧流派で、その俳風には芭蕉の俳諧が根底にあることが知られる。このことから考えても、蕉風連句の発想方法は、本書の制作に関わった層にとって身近なものだったのではないかと考えられる。

絵俳書の発句と挿絵の関係性については、特に与謝蕪村の俳画において、連句の技法との共通点が指摘される。『両兎林』の発句・挿絵の関係は蕪村の俳諧画賛に先行するものであり、俳画の形成史を考える上でも、重要なものであると言えるであろう。